

和水町原口「正元寺」に残された漢詩三枚

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷和生

1 菊水に残された特攻隊の記憶「赤穂原（あこうばる）飛行場」

和水（なごみ）町竈門（かまど）所在。

戦史叢書に記載の「山鹿」飛行場と想定でき、小字名から「赤穂原・竈門」飛行場とも呼称する。昭和19年秋頃には測量を実施し、滑走路は全長900m、幅150m、近隣住人が勤労奉仕で台地下の菊池川より川原石・礫を採集し表面に敷き転圧して施工したとされる。

1945（昭和20）年6月6日以降、熊本市北区植木「木原野（きばるの）秘匿飛行場」を設営した「陸第七〇五七部隊」が転進し、敗戦まで造営を行った。なお、この部隊には、小国町出身の坂本善三画伯が再招集された「ヒゲの曹長」として従軍していた。

部隊本部は大江田原口の正元寺に置かれ、兵員約200人が「川沿国民学校（旧菊水西小学校・現在は廃校）講堂」等に、朝鮮人労働者200人は「東郷国民学校（旧菊水東小学校・現在は廃校）」に分散していた。飛行場設営には、ブルドーザー1台・ローラー2台等も使用し、敗戦時にはほぼ完成。その後はトロコレールで封鎖し、ヨモギを植えた木箱等を配置して艤装。当時の証言からは、飛行機を隠す場所として「無蓋掩体壕（県内調査事例では木製有蓋掩体壕か）」数基が滑走路北側の傾斜地設営したとされるが、現地では確認できていない。

なお、昭和20年2月には近隣の玉名飛行場より特攻用の練習機2機を陸路移送し、「江田国民学校（現菊水小学校）講堂内」に敗戦まで保管。また前原区東方には、格納壕の掘削中に敗戦となる。

昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となったが、中等練習機特攻機振武隊の部隊常駐は見られなかった。



写真1 山鹿赤穂原秘匿飛行場の滑走路跡全景

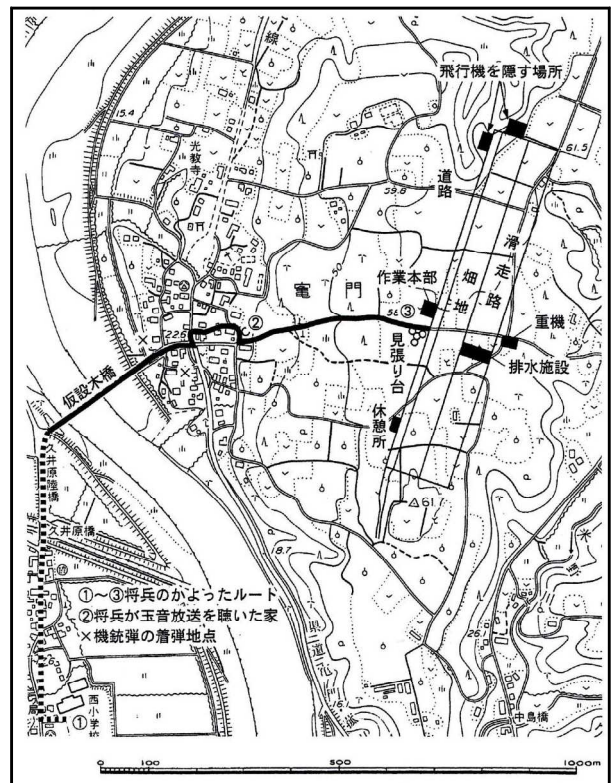


図1 山鹿赤穂原飛行場の配置図

『菊水町史』より



写真2・3 部隊が駐屯した川沿国民学校（旧菊水西小学校）と東郷国民学校（旧菊水東小学校）

写真4 前原区東方に設置された飛行機格納壕

2 正元寺と三枚の漢詩

(1) 正元寺 (しょうげんじ)

和水町原口45番地に所在する正元寺は、浄土真宗本願寺派の古刹である。開山は現住職「寺添真顕 (しんけん)」氏によれば「当初、当寺は山鹿市鹿央町米野 (めの) 松か平に開山され、その後浄土真宗に改宗、天文十三 (1544) 年、現原口に移転した」とされる。

昭和18年頃、当寺住職「寺添欣也 (きんや)」氏は「千島方面の樺太要塞・北方戦線」に出征し、寺は住職の母と妻「寺添近香 (きんこ)」氏が坊守として寺を持続させ、陸軍設営部隊に対応したとされる。また、戦後に生まれた前住職「寺添和南 (わなん)」氏によれば、当時欣也氏の実弟・熊本市北区植木町山本の「上村誠也」氏も同居していたとされる。



写真5 設営部隊本部があった正元寺の山門



写真6 東洋のグレー「坂本善三画伯」HPより

(2) 三枚の漢詩

□今回「三枚の漢詩」は折りたたんだ状態で、前住職「寺添和南」氏居室の棚から、発見された。いずれも軸装仕立て前の「まくり」状態である。この棚内には、当時住職の時代の各種資料 (書、手紙等) が、積み重ねられた状態で保管されていた。三軸は、仮にA「四文字 まくり一枚」、B「詩書 時事小言 まくり一枚」、C「詩書 時事小言 まくり一枚」と呼称する。

□漢詩三枚の釈読は、玉名市文化財保護審議会委員「村上晶子」氏による。

□A「四文字 まくり一枚」

○規格は、全長138cm、横幅41cm

○文字は、四文字である。

○文意は「海白し、まさに駈 (か) けるべし」である。

○記銘は「昭和十六年 秋」と読める。

○落款は方印「非無」であるが、作者情報確認できない。



写真7・8 A「四文字 まくり1枚」



海	昭和十六年 秋
白	駈
印	當
白文方印	力
「非無」	印

□ B 「詩書 時事小言 まくり一枚」

○規格は、全長 128 cm、横幅 33 cm

○文字は、全 28 文字である。七言絶句・七言漢詩である。

○文意は「抗日功なく未だ息（やま）ず只（ただ）、勢い飛び猶（なお）連盟に頼らんと欲す、宵（よい）の夢破る金陵（きんりょう・南京の古名）の月、銀翼（飛行機）縦横爆撃の命」「時事小言」

○関防印は、白文長方印で「風流禅」

○落款は、丸落款が上位置で赤文円印「愛堂」、四角落款が下位置で白文方印「夜雨荘」である。

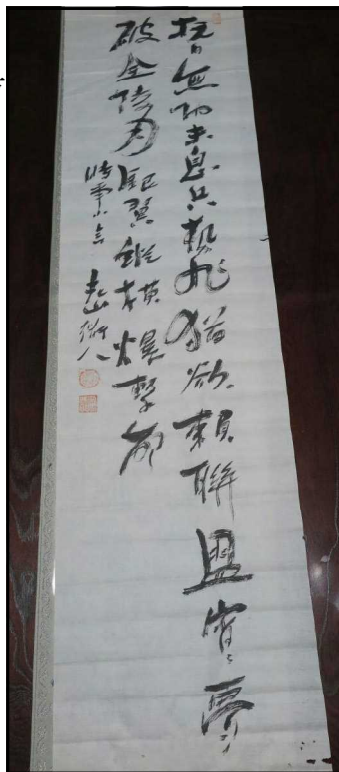


写真 9・10・11

B 「詩書 時事小言 まくり 1 枚」

□ C 「詩書 時事小言 まくり一枚」

○規格は、全長 125 cm、横幅 37 cm

○文字は、全 28 文字である。

○文意は「漫（まん）に連盟に向い頻り（しきり）に哀れみを乞う、党中揃う党互いに嫌猜（けんさい・憎み疑う）、咄哉（あゝ）狂態（きょうたい・正気とは思われないような行動）にぞ改め、四百山河（しひやくさんが）を劫灰（きょうかい・戦火）に任す」「時事小言」

○Bと同じ関防印は、白文長方印で

「風流禅」

○落款は、四角落款が上位置で白文方印「夜雨荘」、丸落款が上位置で赤文円印「愛堂」である。

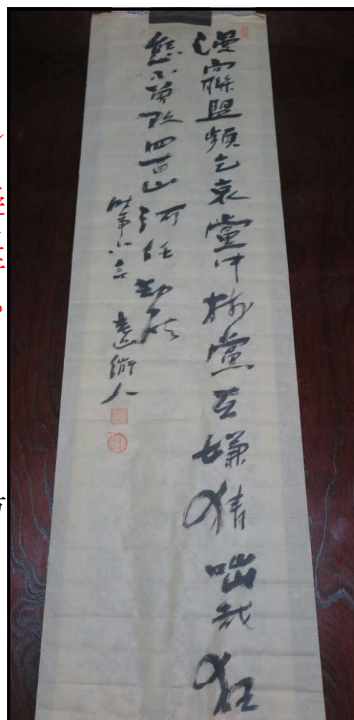


写真 12 C 「詩書 時事小言 「まくり 1 枚」

印 関防印 赤文円印「愛堂」 白文長方印「風流禅」 白文方印「夜雨荘」

銀翼時事小言 春山衛八カ 勢飛猶欲頼連盟 宵之夢破金陵月

印

印 漫向連盟頻乞哀 党中揃う党互に嫌猜 咄哉狂態にぞ改め 四百山河任劫灰

時事小言 春山衛八カ

印

印

3 まとめ

- ①本資料のA「四文字 まくり一枚」とB「詩書 時事小言 まくり一枚」・C「詩書 時事小言 まくり一枚」とは、筆が異なる。
- ②Aからは「昭和十六年 秋」銘とあるように、太平洋戦争開戦前の1941（昭和16）年の日本国内の日米開戦に向けての風雲急をつげる歴史状況が見てとれる。
- ③B・Cともに昭和期の作と想定できるが、詳細時期は不明である。ただ「時事小言」とあるよう「日中戦争の時局を憂う」内容である。
さらには「咄哉狂態」と記し、無策のなかで泥沼化している日中戦争に、作者として批判的な時評内容と思われる。
- ④印からは、県北部地域の過去作例での作者情報は得られない。
作者名の「春山衛八（はるやまみちはち）」は、該当する文字が見当たらないので「衛＝道」とする近い文字をいれる。
- ⑤作者は、当寺住職「寺添欣也」氏及び近しい縁故者・門徒者等が想定される。
- ⑥言論統制が厳しくなる当時状況のなか、軸装を前提とした「まくり」ではあるが、時事小言として「時局を憂い、庶民の戦争観」を示した貴重な漢詩である。
- ⑦1945年6月～8月まで当寺に滞在した陸軍設営部隊「陸第七〇五七部隊」との関連性は、なかろうと想定できる。

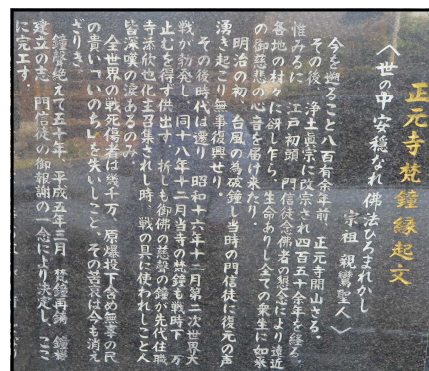
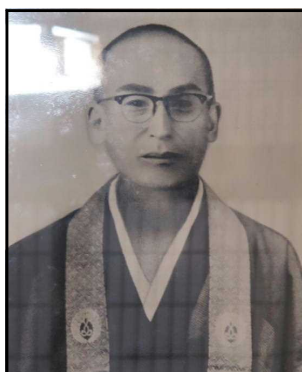


写真13 第十八世 住職「寺添欣也」氏

写真14 前列左から3番目 当時の坊守「寺添欣香」氏 後段左から3番目 前住職「寺添和南」氏

写真15 「正元寺梵鐘縁起文碑」の抜粋 ※開山・戦時部分

[参考文献]

- ①高谷和生「山鹿秘匿飛行場」『くまもとの戦争遺産』2020年 熊日出版
- ②高谷和生他『陸軍人吉秘匿飛行場 木製有蓋掩体壕の埋蔵文化財調査』2017年 あさぎり町教育委員会
- ③「赤穂原秘匿飛行場 余聞」『菊水町史 通史編』2007年 菊水町史編纂委員会
- ④「まぼろしの赤穂原秘匿飛行場」『菊水町史 資料編』2006年 菊水町史編纂委員会
- ⑤「内田手永 原口村」『肥後國史』1926年 九州日日新聞社印刷部
- ⑥『熊本県地名大事典』1987年 角川書店



連絡先
 □くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
 個人携帯 090-1513-5528
 Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
 HP URL http://www.kumamoto-senseki.net/



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク